

二人だけが知る

不思議ちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様から《人特攻》《人特防》の特典をもらい転生した。しかし効果の及ぶ範囲は広く、周りとの関わりを持たなくなっていた。

高校2年になり、転生のことをすっかり忘れていた彼は新生の1人を見て思い出し、彼女——雪ノ下陽乃と関わらないようにした。

目次

一話	1
二話	5
三話	8
四話	11
五話	13
六話	18
七話	22
八話	26
九話	30
十話	35
十一話	40
十二話	44
十三話	49
十四話	54
十五話	58
十六話	61
最終話	64
おまけエンディング (BAD END)	69
おまけエンディング (HAPPY END)	75

一話

人は常に愚かである。というのが俺の持論である。

何をもってそのような考えかを述べると実に文庫本1冊以上にも及ぶ。

中で1つ挙げるとするならば、人間関係だろうか。

一見、仲睦まじい女子グループがあるとする。楽しそうにお話しているではないか。——なんて思っただけではない。

裏では牽制、蹴落としあいの合戦である。

そんな表面上だけ取り繕い、言葉という鎖で相手を縛り、自身が優位になるようにとするための希薄な関係。

それは大人になっても変わらず、自身の地位を守るためにも——。

「先輩、聞いてますか？」

声をかけられ、考え込んでいた意識が浮上する。

「全く聞いていなかった」

「全くって……真面目な相談だつて言ったじゃないですか？」

今現在、目の前に座る彼女を見遣れば。少し赤らめた頬を膨らませ、怒ってますよとアピールするためか腕を組んでいるが。

その実、自身の武器となる身体むねを強調してからかかってきているのが分かる。

それを一瞥して鼻で笑い、手に持っていた文庫本へと目を落とせば。対応が気に食わないのか何やら騒がしいが、それも少ししたら落ち着く。

何やら企んでいる雰囲気を感じたが、コーヒーの注がれたカップに手を伸ばせばすぐに引っ込んだ。

チラリとバレないように横目で確認すれば、俺の反応をどうやって引き出そうか。なんてことを考えながらカップを両手で包むようにして持ち、コーヒーを飲んでいる姿が見える。

……………はあ。

「……………つまらなければすぐに帰るからな」

「うんうん、そうこなくっちゃー！」

人に対して面倒だと感じるなんて、いつ振りだろうか。
俺がこうなってしまったのは『転生特典』というやつのせいなのだ
が。

やはり彼女——雪ノ下陽乃には期待せざるを得ない。

☆☆☆

ふと気付いた時、3歳の子どもになっていた。

何を言っているのか俺自身でさえも分からないが、事実なのだから
仕方がない。

一通りの混乱が落ち着いたのを見計らったようなタイミングで『情
報』が脳に流れ込んでくる。

前世で死んだ俺は神様に出会い、特典として《人特攻》《人特防》を
もらって転生した。

転生先はランダムらしく、どうなってもうまく活用できそうなもの
として選んだ特典だ。

負荷がかかるため3歳までは記憶が封印されていたという。

ここがどの世界なのかまだ分からないが、何とかなるだろうと言っ
た余裕が、この時の俺にはまだあった。

幼稚園、小学校を過ごし。もらった特典の幅広さに俺は言葉を失っ
た。

ただ単に物理が強くなるだけだと俺は思っていたのだ。

しかし、蓋を開けてみればそれ以上だった。

《人》に対しての特攻、特防はケンカで強いだけでなく。言葉に対し
ても《力》を持っていた。

俺は人に何を言われても、それこそどんな口汚く罵られようが褒め
られようが何も感じることはなく。

逆に俺が軽くバカにされただけで相手は傷つき、褒めればとても喜ば
れる。中には感動して泣きだすものまでいた。

それは芸術にも当てはまり、運動のほとんどにも当てはまった。

一部、陸上や水泳など、直接人と戦わずタイムを競うものには当てはまらなかったが。

勉強は人が解き明かしたものだからなのかできる。テストもどのような問題が出るか、先生の授業を受けていたらなんとなく分かるのだが……どういった原理なのか。

人が何をしたいのか、何をやろうとしているのかが分かる。何で分かるのか分からないが、分かるのだから仕方がない。

あとは意識して行動するだけで人に魅せることが出来る。

この辺も発動条件がよく分からないが、魅せたい相手を意識する事が条件だと思っている。

結局、自分でも何を基準に効果が出るのか分かっていない。

ただ感動を覚えるのがほとんど自然になり。人の嫌なところが目につき、他人と必要以上に関わらないようになった。

受け答えはするが、1人で本を読んでいる時間の方が圧倒的に多い。

だから中学を卒業し、振り返ってみても。周りは泣いている中人、どこか浮いている気はしたが。

それでも心が揺れるようなことはなかった。

高校は家から近いという理由だけで総武高等学校に通うことを決めた。

入学式があり、教室で自己紹介をし。グループができていく。

この学校に知り合いは殆どいないため、俺を知らない子が声をかけてくるが。1週間もすれば中学と変わらない状況が出来上がっていた。

また何も起きないまま卒業して大学に入り、卒業して就職。

一体何をして生きていきたいのだろう。

最近はこのような自問が増えたような気がする。

そして代わり映えのしない日々を送りながら高校2年へと上がっ

た時。

すっかり忘れていたことを思い出した。

総武高等学校で気付けたはずなのに。

教室から外を見ていて彼女を見つけた。

その時、長らく人で動くことのなかった感情に反応があった。

ただど関わりとろくな事がないという印象しかない彼女と接点を持ちたくない。

そつと目を逸らし、何も見なかったことにした。

『俺ガイル』に登場するキャラクター。

——雪ノ下陽乃から。

二話

大体の学校では入学して1週間もすればグループが出来上がり、1ヶ月が過ぎる頃にはグループも固定され、新しい環境に慣れて多少の落ち着きが出てくる。

だが、今年度の新入生はとある1人の女生徒によって少し様子が異なっていた。

グループは確かに出来上がり、カーストもあるのだが、それらの頂点に女王がいる。

カースト上位に位置するような人ばかりが周りにいるが、そんな彼女は皆平等に接していた。それを見て彼女の好感度が上がり、慕う人が増えていく。

多感な時期である学生にとって彼女が話題にならないなんてことはなく。ひと月が経つ頃にはその噂は学年を超え、上級生までもが件の女生徒を見にクラスまで押しかけていた。

そんな彼女——雪ノ下陽乃のことを知らないという人が居なくなるのに、そう時間はかからなかった。

「そういえばそろそろ中間テストが迫ってきてるけど、陽乃ちゃんは大丈夫？ 最初で躓くと後に響くから、俺が教えてあげよっか？」

中間テストまで2週間と少し余裕があるが、ある程度の人を取り掛かるであろう時期。

勉強を教え、好感度を稼ごうとするのが丸わかりな男子生徒だが、それでも嫌な顔ひとつせず。

「それは良いですね！ みんなで勉強会だなんて！」

「え、う、うん。こっちも良い復習になるからね。他の人にも声かけておくよ」

純粹な笑みを向けられた男子生徒は望んだ状況ではないが、否定して拒否されるよりはとその案を受け入れた。

男子生徒を見送った陽乃は残った休み時間でクラスにいる子へ声

をかけたたり、SNSで作ったグループに勉強会のことを伝える。

学校が終わるまでには参加するかの返事もきて人数も分かるだろうとスマホをしまい、次の授業で使う教材なんかを用意して、ふと外に目を向けた。

校庭には体操着に着替えた男子生徒たちがおり、もうすぐ始まるであろう授業を待っていた。

そんな中、1人だけ少し距離を置いている男子生徒に陽乃の目が向く。

同じ学年とは少なくとも1回は顔を合わせているため、上級生とまでは絞れたが、2年か3年かまではこの距離で判断がつかない。

ただ、自惚れで無ければほとんどの男子生徒は声をかけるかけないは置いて遠巻きにでも見に来ていると思っている。

それでも彼を見たことがないため、隠れて見ていたか、そもそも会ったことがないのか。

「……………ふふっ」

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきたために観察はそこで終わってしまったが、面白いおもちゃを見つけたと笑みを漏らす。

この時、隣に座っていた男子生徒が笑い声を聞いて陽乃の顔を見ている。

その笑みはこれまで見たことがない心からの笑みだったという。

☆☆☆

……………見られてるなあ。

そちらに目を向ければ目が合うため、確認することはないが、確実に見られていると分かる。

他の人から見られた時と似たような感覚だが、雪ノ下陽乃のそれは質が違うように感じた。

なんだか興味を持たれた気がする。

俺1人だけ少し周りと距離があるし、これまで雪ノ下陽乃と会わないようにしてきた。

だからこそ興味が向いたのだろう。

「……………はあ」

体育教師が来たため、そちらへ向かう途中にため息が出た。

そしてその事実を認めた時、自分自身に少し驚く。

自身に関することでため息なんかいくらでもついてきたが、人が関係してついたため息はいつぶりだろうか。

まだ直接関わっていないというのに、これほどの影響があるとは。

特典のせいで色褪せてしまった世界だが、彼女ならばこんな世界にも彩りを与えてくれるだろう。

だが原作の彼女を知っている分、どうしても1歩が踏み出せない気持ちでいる。

そんな俺を笑うかのように、授業が始まっても時折、雪ノ下陽乃から視線を感じていた。

私のおもちやだと主張するかのように。

三話

中間テストの勉強会をやるから、先生としてきてくれと頼まれた。こういった頼み事は珍しくないのだが、話を聞くに同級生だけでなく1年生の子たちもいるらしい。

普段ならば大して労力もないため、受けても構わないのだが。1年生も含めた勉強会となると、ほぼ高確率で雪ノ下陽乃がいるだろう。そもそも、この勉強会だって彼女が発案の可能性すらあるのだ。

おそらく、彼女の好感度でも稼ごうと勉強云々の話をしてこうなったのだろう。

……………。

「……まあ、いいよ」

「本当かつ!? 助かる!」

コンビニのスイーツ奢るなくと、声を残して彼は去っていった。

今までも手伝う代わりに献上品みたいな形で貰っていたが、今回はなあ……。

特典のせいで失った彩りは欲しいが、面倒ごととはあまり好きではない。だが、好きではない面倒ごとが彩りを与えてくれるのもまた事実。

まだ直接会っておらず、間接的にしか関わっていないのに、いつもの退屈な日常とは少し違った日々を送っている気がする。

それ程までに感情というものは大切なのだ。

これから先訪れるであろう自身の変化に少しの怯えと、期待を抱いていた。

これを機に少しは周りと関わってみようと一歩踏み出してみようか。

次の授業の準備を終え、窓の外に目を向ける。

学年が上がって窓から見える景色が少しだけ変わったが、それらにも見慣れてきた頃。

風に揺られた木の葉たちがいつもよりも少しだけ青く見えるよう

な気がした。

☆☆☆

翌日。

先生を頼まれたわけなので、去年作ったプリントを聞いた人数分プラス予備を学校でコピーし、頼んできた男子生徒に渡ししておく。

彼の名前は……なんていったかな。覚える努力をしてみよかつたが、これからはもう1歩踏み出してみようと思うから、今のところは猫くんまで。

名前がまだないわけじゃないのは分かっている。

やる場所をまだ聞いていないけど……うん、もし伝えられなかったら今日は帰ろう。

なんて考えはやっぱり甘いよな。

忘れられずに連絡がきたため、こうしてきちんと放課後に残っている。

勉強会が始まらないのは猫くんがきていないから。なんでも朝に渡したプリントを汚したらしいので刷っている。

教室の隅つこに腰掛け、本を開く前に1度見回してみる。

今日集まったのは同級生含めて20人ぐらいか。

大体が雪ノ下陽乃が目当てなのだろう。カースト上位にいるような人たちしかいない。これだと本当に勉強したい人は来れないだろうな。

件の雪ノ下陽乃は人に囲まれているため、その姿は見えない。

個人的に俺はいらなと思うのだが、勝手に帰ってもいいだろうか。

1歩踏み出そうと決めた手前、色々とダメな気がするけど。

息を吐き、続きを読もうと本を開いて栞を取ったところで猫くんがやってきた。

もう少し時間がかかると思っていたのに……まあ、どちらにせよ最

初は俺が関わることなんてないし、彼らに任せておこう。

「今から30分で渡したプリントの問題を解いてくれ。分からなかったら飛ばしても大丈夫だから。それじゃ、始め！」

猫井先輩の声を合図に皆は問題を解きにかかる。思っていた勉強会と違ったのか、やる気が見るからに下がっているが、問題は一応まじめに解いているようだ。

結果によつてグループ分けされるようだし、それでまじめに解いているのかもしれないけど。

このテストで現状の苦手分野が分かるらしいけど……果たして、誰が作ったのやら。

目を向ければ周りにも気付かれるから出来ないけど、一番後ろで本を読んでいる先輩。

名前は確か……神宮桜、だったかな。

2年生どころか、3年生の先輩でさえも彼のことを呼ぶときは『神宮さん』と言っていた。

一瞬しか見ることができなかったけど、不思議な印象を受けたのは確か。

何故こう思ったのか分からないけれど、あの先輩はきつとこれまで私が見たことない景色を見せてくれるだろう。

この予感はず絶対だと断言できるほど確信めいたものだった。

四話

30分が経ち、テストが終わった。

私たちが解いた用紙は集められ、後ろで先輩たちが採点をしている。その中には神宮先輩の姿も。

「それじゃ、採点が終わるまでの間に紙を配るから。この紙にどの科目をやりたいか書いてくれ」

渡された紙になんて書こうか。

元々勉強にはそれほど困っていなかったのだが、入学して日の浅い内は断らずに人脈を広げていこうと思ったのだ。

あまり意味のない時間を過ごすと思っていたが、まさかここで少し興味の湧いた先輩との接点を持つとは。これは私の普段の行いが良いからだろう。

まだ名前と学年しか自己紹介で聞かされていないし、言葉も交わしていない。この勉強会で上手く教えてもらうにはどの科目を書くべきなのか。

「雪ノ下なんだが」

うん？

はて、私が何かしただろうか。

心当たりは……うん、まだ何もしていないから無いはずなのだが。振り返り見れば、採点が終わったらしき神宮先輩が紙を1枚手に取りながら立っていた。

「テストも満点だったし、俺たちが教えるというよりも復習も兼ねて教師側にまわるのでいいんじゃないか」

それは困る。

教えてもらい、もっと多くの接点を持つきっかけが無くなってしま

う。
……いや、教えるという同じ立場を利用すれば日頃から声を掛けることが可能になると考えればそれも悪くないか。

雪ノ下陽乃が俺に興味を持っていたというのは気のせいだろうか。だろうか。

目の前にあるペケのない答案用紙を見ながら少しだけ考える。

満点を取らずに教わる側となり、接点を持つてくるものだとばかり思っていた。

………雪ノ下陽乃は厄介だという先入観が思考をややこしくしているような気がしなくもない。

ただ、今回はいくら考えようこの答案用紙にペケが付くことはない。

だから雪ノ下陽乃は教師側にとっただけなのだ。

振り返り、こちらに顔を向けていた雪ノ下陽乃の表情には『困る』と書かれているように見えた。

彼女は何に困っているのだろうか。

教師側にまわるデメリットを普通に考えるならば、俺に教わるという可能性がゼロとなるだけだ。

雪ノ下陽乃ならばどんな些細なことでも会話のきっかけにして声をかけてくるに違いない。

その考えは間違っていないかったらしく。……現に、表情が変わった。

同じ教える立場を利用して声をかけようとか考えているのだろうか。

もしかしたら斜め上をいく考えかもしれないが……心が読めるわけじゃないので分からない。

けど、これからは日常生活に雪ノ下陽乃が入り込んでくるだろうことはなんとなく理解していた。

五話

そして勉強を教えるグループが分けられたのだが……。

「よろしくお願ひしますね、神宮先輩」

俺は雪ノ下陽乃の補佐という立ち位置になっていた。

彼女と近づきたいからこの勉強会を開いたんじゃないか？

これこそ絶好の機会だというのに……とちって格好悪いところを見られたくないと怯んだのか。

雪ノ下陽乃、そして教える一年生によくと声をかけ、今後教えていく内容を口にする。

そして一時間ほどかけている基礎を教えて今日は解散となった。

ただ、他のグループとは違い俺のところはキツチリやっているから、楽しそうではない。

大半が雪ノ下陽乃に近づくためであるから、ここまで真面目にやるとは思っていなかったのだろう。

「次からは言ってくれば他のグループに入っても大丈夫だよ。この勉強会自体強制じゃないし、好きなきにきてくれたらいいから。

……今日はお疲れ様」

こう言ったのは受け持つ子が居なくなれば俺のお役は御免だからである。

いくら雪ノ下陽乃も一緒にいて教えてもらえるとあっても、この調子ならこないだろう。

他のグループもぼちぼち片付けに入っているし、俺は一足先に教室を出ていく。

早ければ明日からまた自分の時間ができる。

雪ノ下陽乃も大人しかつたし、これでデザートを貰えるのは美味しいな。

教室を出て行った神宮先輩の背中が見えなくなり、視線を前に戻して同級生に目を向ければ。

私のことが眼中にないくらいやる気に満ち溢れている姿が映った。勉強は他のグループを羨ましそうにしながらも一応真面目にやっていた。

私目当てであったとしても他のグループにいくかも来ないと思っていたけれど、最後の労いでその可能性はなくなったように感じる。

既にほとんど人の言葉で心動かされなくなった私でさえも『お疲れ様』と言われたとき、嬉しいと感じてしまった。

教えてるとき、近くにいた神宮先輩を観察していたけれど……一瞬見たときに感じた不思議な印象はなく、どこまでも普通に思える。

いままで見たこともないタイプであるし、色々と興味が尽きない。一緒に帰らないかと声をかけられたが、用事があると断り、神宮先輩を追いかけるため教室を出て行った。

けれど昇降口に姿はなく、見回しても校門に影すら見えない。

……仕方がないけれどまた明日に出直すしかないか。

けれどこのまま家に帰っても暇になってしまいうわけだし。

どこかで暇つぶしでもしていこうかな。

普段は通らないような路地を歩いているとお洒落な喫茶店を見つけた。

外観の雰囲気よし。そして内装の雰囲気もグッド。豆のいい香りが鼻をくすぐる。

知り合いでここにくるような人なんていないだろうし、味も良ければお気に入りかな。

「いらっしやいませ。カウンターとテーブル、どちらがいいですか？」

「んー……あ、待ち合わせです」

どちらにするか店内を見回していたら、見つけてしまった。

店員の案内を断り、そこを目指して向かっていく。

「こんにちは、先輩。相席いいですか？ あ、アイスコーヒーをお願いします」

「……………許可出す前に座って注文している人のセリフじゃないな」

ノックをしても返事がある前にドアを開けるように、一応声はかけ

るものの返事がある前に座り、飲み物を注文する。

読んでいた本から顔を上げた先輩はあまり表情が変わっていないように見えるが、安寧の地を脅かされているように感じがした。

私がきているというのに、失礼な先輩だ。

「先輩はここで何を？」

「読書」

「毎日()で？」

「たまに」

私が話しかけているというのに、先輩は再び本へと目を落とす。

返事も会話を続ける気がない淡白なもので、ページをめくる音が耳に届く。

「……………」

けれど思い返してみればこんな反応は今までになく新鮮で、不思議と居心地の悪くない雰囲気だ。

アイスコーヒーを半分ほどまで飲み進め、私もカバンから本を取り出して読み進めていく。

一瞬だけ視線を感じたような気がしたけれど、それもすぐになくなり。

あとは互いの本をめくるページの音が時折聞こえてくるだけとなっていた。

初めは雪ノ下陽乃がきたとき、新しい場所を探すかなと考えていたが。

本を読んでしばらくしたら大人しくなり、彼女も静かに本を読み始めた。

ここには知り合いなんてこないし、雰囲気も良く、味もいい。好条件が揃っているこの場所を逃すのは嫌だったので、大人しくしてくれる分にはとても助かるのだが。

もし雪ノ下陽乃もここを気に入ったのだとしたら、毎回大人しくしているとも限らない。

「……………」

でも、モノクロとなった世界。そこに彩りを与えるキツカケとなつてくれたのは雪ノ下陽乃だ。

そして一歩踏み出してみようとも思つたわけだ。

ならば暫くはこうしているのも悪くはないかもしれない。

家に帰ろうとカバンを肩にかけ直し……一度店を振り返り見る。

なんだかこの場所で雪ノ下陽乃と過ごす時間が増えていくのだからといった予感があつた。

☆☆☆

中間テストが終わり、テストも返ってきたのだが。

テストが始まるまでずっと、教師役が解かれることはなかった。

教えている子みんなは二日目以降からずっとやる気に満ち溢れており、いい点が取れたと報告に来たほどだ。

もう教えなくても済むよう、復習が大事だよ、分からないところは先生に聞きなとアドバイスしておいた。

次は期末テストが控えているわけだが、コンビニのスイーツだけじゃ割に合わなかつたのもう勘弁願いたい。

何かと絡んでくるかと思つていた雪ノ下陽乃だったが、案外おとなしいもので。

喫茶店でも俺と同じように本を読むだけであつた。

何を考えてるのか分からないが、わざわざ藪をつついてやる必要もないし放っておいたのだが。

「先輩、聞いていますか？」

「聞いてない」

「なら今度こそ聞いてくださいいね」

急に騒がしくなり、本を読んでいてもお構いなしにこうして声をかけられていた。

雪ノ下陽乃も本を持ってきているのだが、それは開かれることなくテーブルに置かれたままである。

本があるのならいつもと同じように読んでいればいいものの、何があつたのだろうか。

「ごこしばらく、先輩のことについて情報を集めていたんですよ」

「大人しかったのはそういうわけね」

所詮は嵐の前の静けさだったというわけだ。

相手するのも悪くはないが、なんとなく、ただなんとなくといった理由だけで素直に相手をしない。

「雪ノ下陽乃……大したものだ」

「急にどうしたんですか？」

首を傾げて尋ねてはいるものの、内心で『何言ってるんだコイツ』と思っているのはきつと誰でも分かることだろう。

「いんや。……きつとそのうち理解するだろうさ」

「はあ……」

自分自身は《特攻》《特防》と認識しているが、それを知らない周りの人たちの反応はだいたい二つに分かれる。

俺のことを聞いているのなら、聡明な雪ノ下陽乃のことだ。近いうちに気付くだろう。

そして俺の言った意味についても。

雪ノ下陽乃が俺と過ごしてどうなるのかは分からないけど。

「話とやらはすぐに終わるのかな？」

「やっと聞く気になってくれました？　先輩について調べてたわけなんですけど——」

少しは一緒に過ごしてもいいかな、と思い始めていた。

六話

雪ノ下陽乃と関わる機会が増えてから時の進みが早くなったような気がする。

もう夏休みというものを目前に控え、気の早いセミの鳴いている声が耳に届く。

それだけ時が進んだが、大きな変化はなく。微々たる差だけれど同級生と話す機会というものが増えたように思える。

今までは殻にこもりきっていたが、それを少しずつ破って外へ目を向ければ。

多少の戸惑いみたいなものは見受けられたが、徐々に受け入れられている気がする。

今では多少の挨拶くらい交わしている。

自分が変われば世界が変わる、なんて言うけれど。

確かに、自身をとりまく小さな世界は変わったように感じる。

結局、自分をつまらなくしていたのは自分自身だったというわけだ。

人と関わるのを避けていた時も楽しみだったものや自身なりの楽しみ方があったわけだが、その選択肢が増えたことで視界がひらけた。

今回はたまたま人との関係であつたが、別に他の趣味を見つけるでもないわけだ。

「神宮くんは考え事が好きだねえ」

「半分は癖みたいなものさ」

殻に引きこもっていた時、雪ノ下陽乃みたいに心揺さぶられることはなかったが、一人だけ声をかけてくる女子生徒がいた。

肩のあたりまで伸ばした少し明るい髪。メガネをかけており、可愛いような綺麗なような顔。

パツとはしないけれど、整っているように見える。

彼女との接点はいつだったか、どんなキツカケだったか覚えてはいないけれど、気づいた時には側にいたと思う。

といっても、お昼の時間だけだが。
名前は……これからゆつくり覚えていこう。
殻にこもっていたら身近に何かあっても気づかない、気にも止めない。意識すらしない。

今では少し悪いことをしたと思う。

……こういった他人に感情を抱くのもいい変化かな？

「……何かいいことでもあったか？」

そんな彼女がニコニコしながらこつちを見ているので、問いかけてみる。

今までは気にも留めないでスルーしていたが、こういった会話は大事なのだと認識させられる。

昼はすでに食べ終えており、いつもなら本を読んで過ごしているところだが。

まだ、カバンにしまわれたままにいる。

「神宮くんこうして話ができると思っていなかったから、嬉しいんだよ」

「それは良かった」

「んふふ」

話をしている姿が珍しいのか、時折クラスメイトの視線が飛んでくる。

彼女も気づいているだろうけれど、ずっとニコニコとしたままだ。

それは昼休みが終わるまで変わることはなかった。

☆☆☆☆

「先輩、どういうことですか？」

「どういう事って……何が？」

放課後のいつもの場所。

少し怒っている様子の雪ノ下陽乃は俺の本を取って手元に寄せ、話を聞けとばかりに問い詰めてくる。

「今日のお昼、たまたま用事があってたまたま先輩の教室前を通ったんですよ」

「うん」

「その時にたまたま教室にいる先輩を見たわけなんです、クラスメイトと話していましたよね？」

「話していたね」

「先輩と話するとき、私からしか話を振った記憶がないんですけど」

「その通りだからね」

「でも、あの時は先輩から話振ってましたよね？」

「話振ったね」

「どういう事ですか？」

「……………どういうこと？」

あの雪ノ下陽乃でも多少は行動が読めたりする。…………当たる確率はそれほど高くないが。

それを踏まえても、現状起こっているこれは理解ができない。

果たして彼女は何が言いたいのだろうか。

現実を逃避するため、コーヒーを一口飲んで落ち着こう。

「……………っ」

視界の端で雪ノ下陽乃が少し顔を赤らめ、顔を背けながらもチラチラとこちらを伺っている姿が見える。

……………本当にどういったことなのか。

いや、今のは久しぶりに魅せる動きが発動したのだろうか？

この行動はたとえ雪ノ下陽乃以外が相手だったとしても理解できない自信がどこかある。

きつと、長らく人と接してこなかったことが原因だろう。

前世で培った貯蓄は底をついたという事か。

今のうちにと雪ノ下陽乃の手元にある本を取り、栞の挟んであるページを開く。

しばらくしたら彼女も落ち着きを取り戻してまとめた説明をしてくれる事だろう。

「むむむ…………」

だからそのしばらくの間だけ、本を読むフリをして雪ノ下陽乃を見ていることにしよう。

皮を被った状態ではなく、年頃の少女らしい反応をしているいまの

彼女のことを。

これは今後、何かあった時にからかうネタとなるだろうから。

……人をからかおうなんて思ったのは忘れて久しいな。

言葉の一つ一つを大きく受け止められるから、できなかつた事だ。

読んでもいない本のページをペラリとめくる。

ガラス越しにうつすらと聞こえてくるセミの鳴き声がとても心地

よく響く。

七話

何故、こんなにも胸の内を混ぜられたような形容しがたい感情を抱いているのだろうか。

恋愛なんてものは私にとって一番無縁なものだと思っていたのに。……ううん。この感情が恋愛だなんて認めるのはなんだか癩に触るからまだ認めない。

それに、将来の相手を私が決める事なんて出来ないだろうし。

今はそんな事よりも先輩を問い詰める方がさきだった。

きちんと話を聞いてもらうため、先輩の本は私の手元へと寄せてある。

事の発端はたまたま先輩の教室前を通り、たまたま教室の中に目を向けた時。女の先輩と話している姿を見たのだ。

会話の内容は聞こえなかったけれど、流れはなんとなく分かる。

重要なのは先輩から話を振ったという事のみ。

事前に仕入れていた先輩についての話だと、昼休みに話していた女の先輩は毎日めげずに話しかけていたらしい。

先輩は今までそれをスルーし、たまに相槌を返すぐらいだったとか。

それがここ最近ではクラスメイトに挨拶をしたり、まともな返事をしたりする変化を見せていた。

そして今日、ついには先輩から話を振るまでに至ったのだとか。

どんな心境の変化があったのかを聞いたのに、質問の意図を理解していないのか。何を言っているのか分からないといったふうに首を傾げている。

さっきの返事だって簡単なものだった。

自惚れでなければ先輩と濃い時間を過ごしているのは私だと思っていたのだが。

……いや、この考え自体がすでに自惚れているか。

けれども、少なからず私に対して思うところは何かあるはずだと思っている。

その部分についてどう思っているか聞こうとした時。

ただ先輩がコーヒーを飲んだだけだというのに不思議と目が離せなくなり、開いていた口を閉じる。

すぐに気を持ち直して目を逸らすけれど、先ほどの光景が強く頭に残り、チラチラと横目に先輩の姿を見てしまう。

気を抜いていたからあっさりと手元に寄せていた先輩の本は取り返され、朶の挟んであったページを開いて文字を目で追っている。

「むむむ……」

今日はこれ以上の収穫を見込むことは無理だろうか。

結局、モヤつとした気持ちはスッキリせず。残ったコーヒーを空にするまでの間、先輩を見ているしかなかった。

「ただいまー」

「お帰りなさい、姉さん」

「あれ？ 雪乃ちゃんが出迎えてくれるなんて珍しいね」

「いくら好きでない相手でも挨拶はきちんとするわ」

「そんな事を言われるとお姉ちゃんは悲しいなー」

「ちよっ、抱きつかないでくれるかしらっ」

釣れない事を言う我が最愛の妹へ愛情を表現しようと抱きついたわけだが、全力で拒否されてしまった。

「ん？ どうかしたのかな？」

泣く泣く離れた私はとりあえず着替えようと部屋へ戻ろうとしたのだが、雪乃ちゃんが私を見ていることに気づいて声をかける。

「いえ……別に」

「聞きたい事があるなら言っごらんよ。お姉ちゃん、何でも答えちゃう」

「大した事じゃないわ。……最近、姉さんから豆の香りがするなと思っただけよ」

そう言われて制服の匂いを嗅いでみるけれど、やっぱり自分じゃよく分からなかった。

「最近よく喫茶店に寄ってるからかな？」

「一人なんて珍しいのね。取り巻きはいいのかしら？」

「まあ、そこら辺は上手くね。……ただ、一人で行ってるわけじゃないよ？」

「姉さんに目を付けられるなんてその人も可哀想ね」

「むっ、雪乃ちゃんは私のことをどう思ってるのかな」

その質問に対して雪乃ちゃんは私を一瞥しただけで、自分用に紅茶を淹れ始める。

「姉さんは姉さんとしか思っていないわ。……はい」

「ん、ありがと」

私の分も用意してくれたらしく、着替えるタイミングを逃してしまったが、ありがたく頂くことにしよう。

荷物はソファアに放り、雪乃ちゃんと向かい合う形でイスに座る。

「今回のお気に入りになったオモチャはどれだけ持つのかしらね」

「んー、今までもオモチャにしているつもりはないんだけどねー。

……そのたとえで言うなら、どちらかといえば今回は私がオモチャにされてるかもね」

「……姉さんが？」

冷ややかな目から一転、驚いたように目を少し見開いて真っ直ぐに私を見つめる。

「その人はどういった？」

「私の一つ上の先輩だよ。関係は……なんだろうね。学校の先輩後輩、になるのかな？」

「ここまで姉さんが曖昧な表現をするなんて珍しいこともあるのね」

「そりゃ、私だつて人間なもの」

「……下らない事はやめなさい」

テーブルの下で雪乃ちゃんの足に私の足を絡ませたら一言、叱られてしまった。

足を離れたわけだが、こんな事でめげる私ではない。

もう一度足を伸ばし、足に触れるというところで雪乃ちゃんに睨まれたので、行き場を失った足をプラプラとさせる。

「……その人のおかげなのかは分からないけれど」

「ん？」

「姉さん、少し変わったような気がするわ」

「そうかな？」

「ええ。……少し、柔らかくなった」

そう言われても、自分自身の事は案外分らないものである。

私は私のまま生きてきたつもりだけれど、変わったというなら雪乃ちゃんの言う通り、先輩が関係あるのかもしれない。

……確かにどこかつまらない生き方をしていたけれど、先輩と出会ってからは彩りを感じるようになったと思う。

仮面は被ったままだけれど、先輩だけは素でいられるような。

「……また、こうしてお話ししよっか」

空になったコップから雪乃ちゃんへと視線を移し、そう口にした時。

自然に笑えていたと、鏡を見なくても分かった。

八話

雪ノ下陽乃に問い詰められたが、結局何を言いたかったのか分からなかった昨日が終わり。今日の放課後を迎えたわけだが。

……目の前に座る雪ノ下陽乃の機嫌がとても良さそうに見える。

ニコニコと笑みを浮かべているし、テンションが高いのか鼻歌も聞こえてくる。

これですますます昨日の事について分からなくなった。

いや、この場合は女心を分かっている事になるのか？

……もしかしたら普通は分かるけれど、俺がポンコツなだけとか。そうだとしたら少しショックだ。

《特攻》《特防》に頼りすぎて対人スキルが低くなっている可能性も無いわけじゃないと思うが、ものさしが無いので数値にする事はできない。

「そう言えば先輩。もうすぐある期末試験が終わったら夏休みですけど、何か予定あったりするんですか？」

「去年と同じなら、宿題を終わらせて本を読んでいたたり、映画、水族館とかに行くかな」

「それ、他の人たちとの空気悪くなりませんか？」

何を言っているんだろうか。

他の人との空気が悪くなるもなにも。

「全部一人だけど」

「えっ!？」

「え?」

何かビツクリするようなことを言っただろうか。

驚く声を上げた雪ノ下陽乃につられて俺も声を出してしまった。

「……夏休み、誰とも出かけてないんですか？」

「誰かと出かけた……ああ、母親と買い物に行っただくらいかな」

「……………」

目を見開き、何か言おうと口を開いては閉じるを繰り返している。けどどやっぱり、何かおかしいのか俺には分からない。

確かに一般的には友達と出かけたりするのだろうが、中にはそうでない人もいるだろう。

それに今でこそコミュニケーションを取るようにしているが、去年はそんなの微塵も考えていなかったし。

それで誘われて行くこうものならさつき言っていたとおりに空気は最悪なものになってきている事だろう。

「こ、今年は最近ですけど話したりしてるじゃないですか。……………誘われたりとか」

ものすごく気を使われている。

こういった場面の雪ノ下陽乃はイジってイジってイジメぬくといったイメージだったのだが…………それが出来ないほどに俺は情けないことを言っているのだろうか。

「…………遊びに行かないかと、声をかけられたな」

「む……………どこに行くんですか？」

「ん？ あー、断ったよ」

「へっ？」

素直に誘われたと言ったら急に機嫌が悪くなった。

それを口にする事なく雪ノ下陽乃は話を続けるようだが、断ったと言ったら今度は抜けた声を出し、呆けた表情…………の中にどことなく嬉しさが垣間見える。

この数回の会話で機嫌が何回も変わるような事、あっただろうか？

「それは……………どうして？」

「いくらコミュニケーションを取り始めたとはいえだ。まだそんなに親しくないのだから行っても微妙なだけだろう」

「……………はあ」

「その、『これだから人の気持ちを理解できない鈍感は』みたいな目で見てくるのをやめないか」

「これが分かるのにどうして分からないんですか……………」

分かるも何も…………俺はキチンと相手の気持ちを考えたつもりだ。

誘ってくれた彼らは最近会話するようになった俺も一応誘っておかないと、体裁が悪いから声をかけたただけだろう。

その意を汲んで断ったというのに、何故目の前で呆れたようなため息をつかれなければならぬのか。

「……誘った人はどんな気持ちで声をかけたと思います?」

「最近話すようになったし、乗り気じゃないけど一応声をかけておくか」

「……………雪乃ちゃん。お姉ちゃんに先輩の相手は早かったみたいだよ」

小さな声で呟いたようだが、しっかりと耳にまで届いている。

雪ノ下陽乃が妹の名を口にするほど弱っているとは、何が原因なのだろう。

きつと俺が関係しているのであろうが、分かるのはそこまでだった。

こうして長い時間を過ごしていくほど、想像していたイメージとか
け離れていく。

何をどうしたらこのような拗れかたをするのだろうか。

もしかしたら先輩の言うようなこともある可能性はある。

だが、それよりもあり得るとしたら。もっと親しくなりたいから誘っているのだろう。

……………こちらの考えに微塵も至っていないのだろうか。

だけどそれを素直に教えてあげる道理はない。

断定はできないけれど、あり得るかもしれない可能性を自分の手で大きくするなんて以ての外だ。

「それじゃ先輩、私と出かけませんか?」

「別に無理する必要はないが」

「む、その考えはいけないですよ」

「ん?」

「まだ数ヶ月とはいえそこそこ一緒に過ごしたんですから、先輩の事も多少は分かります。ぶっつけ本番よりは事前に練習が必要ですよ
ね?」

「なるほど」

我ながらよくまあ、こうペラペラと出てくるものである。

.....

別にこれはデートじゃないし、まだ先輩の特別でいられるとも思っていない。

多少はないこともないが、どこかでそれを否定している自分がいる。

「それなら連絡先くらい知っていた方がいいか」

少し混乱している間にスマホとメモ帳を取り出した先輩は何かを書き込んでいき、私に紙を渡してくる。

「俺のメールアドレスと電話番号。空で送ってくれたら登録しとくから」

「あ、.....はい」

大人しい私が不思議なのか首を傾げているけれど、今は胸の内にある動揺を抑えるので精一杯だった。

私から振らなければ話題にすらならないと思っていたのに、こうもあつさりしてくれるとは。

気を紛らわせる為にアイスコーヒーへと手を伸ばすが、グラスの中には氷と溶けた水が入っているだけだった。

九話

テスト返却は前日に終わっており、夏休み前日の今日は午前授業で簡単な注意事項とかがあるのみだったのだが。

俺は平塚先生に呼ばれて職員室へと向かっていた。

雪ノ下陽乃には緑色をしたアイコンのSNSで『遅れていく』と連絡済みである。

連絡先を教えた日の夜。空で来ると思っていたメールに文があり、このアプリをオススメされたのだ。

確かにメールを打つよりは楽であるが、今のところ登録してある人数は両親に妹、雪ノ下陽乃の四人だけである。

わざわざ連絡を入れているのはつい先日、用事があつていつもの喫茶店へと行かなかつた。そしたら次の日、雪ノ下陽乃に怒られたのである。

今までは連絡先を交換していなかったこともあるが、行かなくても特に何か言われることはなかつたというのだ。

なのでその反省を生かし、喫茶店に関することのみ行く行かない、遅れるなどの連絡はするようになった。

返事が来たようだが職員室に着いてしまったので開くことはなく、スマホをしまう。

「失礼します」

「お、来たか。こっちだ」

ほとんどのクラスが終わっている為、職員室には先生が多く、視線を多く感じる。

だが呼び出されたのが俺で、呼び出したのが平塚先生だと分かるとそれも霧散していく。

去年はそこその回数を呼び出されていたし、今年もまあまあ呼び出されていたのでこの場所も慣れたものだろう。

はなから慣れるも何も無かつたのだが。

「それで本日はどういった」

「まあまあ、そう先を急ぐな。コーヒーでも飲むか？」

そばまで寄って何用で呼び出したのが聞こうとしたが、手のひらを向けられて遮られ、何も言っていないのに二人分のコーヒーを用意し始めた。

その動きはなんだか様になっていて、最近豊かになってきた感情がカッコいいと伝えてくる。

湯気が立ち上るコーヒーを渡しながらイスまで勧めてきた。

……これは長くなるのだろうか。

「安心しろ。すぐに終わるよ」

「まだ何も言っていないが」

「ああ、そうだったな。なに、話は最近の神宮をちよつと聞くだけだ」
顔に出ていたのか、心を読んだかのようなタイミングだった。

愉快そうにひとしきり笑った後、優しい目を俺に向けてくる。

「今の君を見ていると去年とは別人のように見えるよ」

「それは自分でも思うところがありますね」

「いい変化さ。私も教師として君をなんとかしたいと思っていたのだがね、お手上げ状態だった」

そう口にする平塚先生は俺ではなく、過去の俺を見ているようだった。

平塚先生は俺の言葉が効いていないわけではない。

ただ、その効果が少し薄いのは確かであった。

だからといって俺の心に響いたかと聞かれたらそういうわけでも無いのだが。

「それが今年に入りしばらく経ってから君を見かけた時は驚いたものさ。今では自ら同級生とコミュニケーションを取ろうとしている」

「まあ、そうですね」

「話は変わるが、今年入ってきた一年生に一人問題児な子がいたんだ」
唐突な話題の変化だが、その問題児が誰を指しているのかは理解できなかった。

「だけどその問題児もしばらくしたら大人しくなった。大人しくなっただけでやるが変わったわけではないがな」

疲れたように笑う平塚先生だが、どこか嬉しさと楽しさを感じ取れ

た。

その笑みを引つ込め、少し真面目な表情を作る。

「……君と彼女は互いが互いに良い影響を与えている。けれど、今の二人は私から見たら薄氷の上に立っているような危うい状態に見える」

その言葉に嘘はなく、本気でそう思っているようだった。

だが、どこにそのような心配を感じているのかだけ分からない。

「この先どう転がるか分からないから私も教えたいのは山々なんだから。失敗も経験の一つさ」

平塚先生はそういう人だから教えてくれないとは思っていた。

話の流れ的にはこれでおしまいなんだろうが、結局話したかったことは俺と雪ノ下陽乃の心配をしてきているということだろうか。

「話をしたいというのもそうだが、ずっと呼び出し続けていたから半分癡みたいになっているんだ。今後も定期的に呼び出すと思うが、許してくれ」

「いいですよ」

すでに冷めてしまったコーヒーを飲み干し、立ち上がる。

「それじゃまた、夏休み明けに」

「神宮なら大丈夫だろうが、気をつけて帰れよ」

「はい」

職員室を後にし、靴を履き替えたところで雪ノ下陽乃から返事が来ているのを思い出したのでスマホを開いて確認すれば、通知が三つほど来ていた。

『了解』『用事ですか?』『どれくらい遅くなりそうですか?』と連続で来ており、まとめて送ればいいのと思ってしまう。

取り敢えず『今終わった。これから向かう』と送っておく。

すでに帰ったかもしれないが、連絡が来てないからまだいるのだろう。

「お待ちせ……かな?」

喫茶店について雪ノ下陽乃のもとに向かえば。

店員がすれ違いで皿を片付けていた。

昼食だと思われる皿にデザート、飲み物のお代わり。

それほど時間がかかっていないはずだが、少し悪いような気がしないでもない。

今は宿題を進めているらしく、すでに数ページ終わっているようだった。

「オムライスとカフェオレ、あとはパフェで」

雪ノ下陽乃の向かいに座り、水を持ってきてくれた店員に注文を済ませる。

けれど未だにこちらを向くことなく、彼女は問題を解き進めていく。

「何の用事だったんですか？」

何を考えているのか分からないが、なんとなく機嫌が悪いような気がして声をかけずらかったが。

向こうから話題を振ってくれたのでそれに乗っかる。

「呼び出されてさ」

「……………女の人？」

「ん？ ああ、そうだね」

「告白でもされたんですか？」

「されていないよ。俺を呼び出したのは平塚先生だもの」

「……………へ？」

イライラしている感じが伝わってきたが、間の抜けた声とともにそれはなくなった。

質問から考えると雪ノ下陽乃は俺が女の子に呼び出されて告白をされたと思っていたらしいのか。

最近まで話もしなかつたやつに告白する酔狂な女の子なんていないはずなのに。

知識としてあった雪ノ下陽乃はまさに完璧といった言葉が似合うのだが、こうして接してみると案外抜けているところがあるものだな。

「さて、待たせた俺が言うのもなんだが。夏休みの予定とやらを立て

ようじやないか」

十話

夏休みに入ったのだが、私はまだ先輩と一度もあっていない。なんでも八月に入る前には宿題を終えたいらしいのだが、先輩なら余裕で終わるはず。

なのに立てた予定だと、会えるのは八月に入ってからなのだ。

「陽乃ちゃん、どうかした？」

「これ、美味しいなって」

「でしょっ！ 私もこれが一番美味しいと思うんだよね」

考えすぎて少し黙っていたようだ。

いま、一緒に遊んでいるクラスメイトの一人から心配されてしまった。

少し早い時間からファミレスで話をしながら昼食を済ませ、コーヒーのチェーン店で持ち帰りした飲み物を飲みながら次の目的地であるカラオケを目指している。

別につまらないわけではない。

ただ、どこか物足りないと感じているだけ。

それは先輩がいないからなのかは……うん。分からないからだ。

これ以上は違和感を持たれてしまうから気持ちを切り替えようとしたところで。

「行くよ、アキ」

「もう、ちよつとは待ってよ」

聞きなれた声が聞こえ、そちらを振り向けば。

初めてみる私服姿の先輩がそこにいた。

荷物を持っており、親しげに話す女の子の姿も見える。

私と同年か一つ下ぐらいの明るく可愛らしい子だ。

先輩はそのまま私に気付くことなく女の子と何処かへ行ってしまったが、先ほどの光景が頭から離れなかった。

話している時、私にも笑みを浮かべてくれることは何度かある。

けれど先ほど見た笑みは根本から何かが違うような、とても自然で柔らかな笑みだった。

気が付いたらみんなと手を振って別れるときだった。

あの子の記憶がサツパリと無いけれど、みんな楽しそうに手を振っていたし対応は問題無かったのだろう。

少し重たくなった足で家に帰り、カバンを床に置いてソファへと倒れこむ。

今までに感じたこと無いほどの疲れがどっと押し寄せ、すぐにでも眠れそう。

「おかえりなさい、姉さん。そんなところで寝たら風邪ひくわよ」

「ただいまー。……んー、今は動けなーい」

「……………はあ」

雪乃ちゃんが呆れたようなため息をつきながら離れて行く気配を感じたが、目を閉じた私は押し寄せる睡魔に勝てず、すぐさま眠りについた。

「……………ん」

もぞりと体を動かし、まだ半分寝ぼけたままだが上体を起こす。

寝る時にはかかっていなかった毛布があるのは雪乃ちゃんのおかげだろう。

なんだかんだで優しいのだ。今度、何かお返しをするしかない。

「起きたのかしら」

「おはよう、雪乃ちゃん」

「ならご飯の準備をするから、姉さんもいろいろとどうにかしたら」

「うん」

すぐにお風呂はいるだろうし、着替えなくても大丈夫か。

床に置いてあるカバンを拾って自身の部屋へと向かう。

簡単に荷物の整理を終え、手洗いを済ませて戻ればテーブルに料理が並んでいた。

「そういえば今日、帰ってこないんだっけ」

「ええ。だから姉さんが料理を作ると張り切っていた気がするのだけれど」

「あー……なんか、ごめんね」

「別にいいわ。あそこまで疲れてる姉さんを見るのは初めてなもの」
これまで雪乃ちゃんには完璧な姉という姿しか見せてこなかったし、これからもそのつもりであったのだが……。

ここ最近、気の緩んだだらしのないところばかりを見られているのは気のせいではないはず。

内心で一つ息を吐いてイスに座り、雪乃ちゃんが作ってくれた料理に手をつける。

「……私は今の姉さんの方が好きよ」

「ほえ？」

「……何かおかしい事でも言ったかしら」

「いや……普通に驚いているというか」

今までそんな事言ってくれたのは……ずっと昔の小さい頃にあつたような気がする。

けれど歳を重ねるにつれ、雪乃ちゃんとの関係は良いとは言えないと思っていたし、実際にそうだった。

それがまさか、再び雪乃ちゃんの口から好きと言ってくれる日が来るとは。

「確かに慣れない事を言っている自覚はあるわ。……でも、キチンと口にしないと伝わらないこともあるものね」

いま、ふと気がついた。

私が変わったのも確かにそうだが、雪乃ちゃんも雰囲気が何か変わったような……？

人が変わったと感じた時、それはその人ではなく自分が変わったのだ。

みたいな話を聞いたことがあるけれど、それを差し引いても雪乃ちゃんは変わった……と思う。

「それよりも、今日は何に疲れていたのかしら」

「……………」

一眠りしてから意識しないようにしていたというのに、ピンポイントでそこを抉ってくるとは。

これまで積み重ねてきたことの仕返しなのだろうか。

内心がそのまま表情に出ている自覚はある。

私を見て驚いた顔をしている雪乃ちゃんを見たら仕返しでないことは分かるのだが、それでもそう思ってしまう。

「姉さんもそんな顔をするのね」

「前にも聞いたと思うけれど、雪乃ちゃんはお姉ちゃんをどう思っているのよ」

「姉さんは姉さん、でしょ？」

このやり取りの何がツボにはまったのかは分からないけれど、クスリと笑みをこぼす。

雪乃ちゃんも同じ気持ちだったようで、笑みを浮かべていた。

「……今日はクラスメイトと遊びに出かけていたんだけどね」

「うん」

「先輩の声が聞こえたから、そっち向いたら実際にいたの」

「声はかけなかったの？」

「知らない女の子と一緒にいたから。……仲よさそうで、見たことない笑顔を浮かべてた」

「その先輩の家族とかではないのかしら」

「先輩の家族についてとか聞いたことない。……まあ、私も話したことないからお互い様なんだから」

気を利かせてなのか夢を持たせてくれるようなことを言ってくれるけれど、これで実際はこ、……恋人、とかだったら何か壊れるような気がする。

私だって確かめたいけれど、真実を知りたくないのもまた本心だった。

……端的に言ってしまうば怖いと感じている。

一步を踏み出し、今の関係が壊れてしまうのを。

「なら、代わりに聞いてもらうとか」

「真実を知ることによって変わるはないから……」

「これ以上は姉さんが頼ってきたらにするわ。あまり部外者が余計な口出しするわけにもいかないものね」

その優しさは嬉しいけれど、もう少し粘ってほしくもある。

「また何かあったら話してちょうだい」

さっさと食べ終えてしまった雪乃ちゃんは立ち上がって空の食器を流しへと運んでいってしまう。

その後ろ姿をなんとも言えない目で見ながら、料理を口へと運ぶ。

……………うん、美味しい。

十一話

八月に入った最初の週。

ようやく先輩と会う日がやってきた。

もしかしたら先輩が来るかもしれないと淡い期待を抱きながら喫茶店に行っていたりもしたが、一度も姿を見ることはなかった。

多少意図的ではあるが、半ば作った偶然で先輩と会えたなら話せると思っていたのに。

モヤモヤとしながら確実に会えるこの日をずっと待っていたけれど、当日になると怖いものがある。

……自分に嘘をつき続けている人にはどのみち最初から勝ち目なんてないのだけれど、いい加減無視できなくなってきたこの気持ちだけが嫌だと訴えかけてくる。

そろそろ家を出ないと待ち合わせの時間に間に合わないが、いろんな感情が混ざってその足取りは少し重い。

「姉さん」

「雪乃ちゃん?」

玄関で靴を履いていると、声をかけられた。

振り向けば雪乃ちゃんが部屋着のラフな格好で立っていた。

「恋愛は当たって砕けるものらしいから、考えすぎない方がいいらしいわよ」

「……………そんなのどこに書いてあったのさ」

「私よ」

いきなりな話に一瞬ついていけなかったが、雪乃ちゃんなりに励まそうとしてくれているのだろう。

「…………ふふっ。そうだね。今まで私にアタックして砕けてきた人たちがいるんだもの。ここでいかなきゃ雪ノ下陽乃じゃないってね」

「今まで告白してきた人と姉さんを一緒にするのはどうかと思うけれど……………」

「…………せつかく切り替えたのに、そういうこと言わないの」

恐らくは素なのだろうけれど、いい感じにリラックスできた。

先輩に会うまで持つかは分からないけれど、とにかく今は家を出ないことには始まらない。

「それじゃ、行ってくるね」

「ええ、行ってらっしゃい」

「雪乃ちゃん、ありがと」

ドアが閉まる前にお礼を言えば、雪乃ちゃんの驚いた顔が見えた。どんなことを考えながら家で過ごしていたのか、帰ったら聞かないと。

時間ギリギリになったけれど、待ち合わせ場所であるいつもの喫茶店へとたどり着いた。

開けるときに一瞬ためらったものの、意を決して中に入ったが。

お馴染みとなった席に先輩の姿はない。

一応店内を見回してみるが、他の席に座っていると行ったわけでもないようだ。

顔なじみになったマスターと店員さんに挨拶しながら席へと移動し、スマホを確認するも連絡はない。

先輩は連絡するのに慣れてないからたまに忘れることがあるし、普段ならば気にしないのだが。

今はなんともタイミングが悪い。

いつ来るか分からない焦らしは精神的によく効く。

取り敢えず頼んだコーヒー一杯分の時間は待ってみよう。

集中できるかは分からないけれども時間つぶしは持ってきている。

………一応、遅れそうなのかだけメッセージを送っておこう。

初めに決めたコーヒー一杯分が終わりそうなところでスマホに通知が来た。

これまでも何度かきていたが、同級生や先輩のため既読をつけないでスルーした。反応したら長くなる。

あまり期待をせずに確認すれば、そこには先輩の文字が。

内容は『急用ができて行けなくなった。すまない』とだけ。

「……………」

色々複雑な心境であったが、先輩に会える今日を楽しみにしていたというのに。

こんな仕打ちをされたのならば何か仕返しをしないと気が済まない。

次会うときは先輩に全部エスコートをしてもらわなければ。

先輩はもう少し他人についてよく考えるべきだと思う。

これまでの不安は何処かへと飛んでいき、今は先輩をどうしてやろうかと考えるので一杯だ。

ムカムカを食欲で抑えようとパフェ、コーヒーのおかわりを頼む。これで太ったら先輩に責任を取ってもらわないと。

☆☆☆

雪ノ下陽乃との約束をドタキャンしてしまった。

前までの自分ならこんな感想すら浮かばなかつただろうが、今では申し訳なさを抱いている。

現状、ここまで思うのは今のところ雪ノ下陽乃だけだが、誤差の範囲かもしれないけれど多少はクラスメイトにも感情が動くようになってきた。

もらった特典のオンオフが多少なりとも出来るようになったということだろうか。

「桜くん、また考え事？」

「……そんな事ないさ」

「私にそんな嘘は通じないよ」

ちゃんと私の相手をしろー、と言ってくる目の前にいる子は神宮秋。俺の妹である。

今日が誕生日である事をすっかり忘れており、家を出ようとしたところ泣いて縋り付かれた。

雪ノ下陽乃と同じ高校一年生なのにこの差は何なのだろうか。

妹であるアキ、そして両親にも心揺さぶられることはない。

ないのだが、話しにくい。

《特攻》も効くのだが、その日の調子だかメンタルだかで効かない時もある。

なので発動条件を考えるときは家族を別枠で考えなければならぬ。
い。

また深く考えていたら、アキに頬を引っ張られた。

「ただでさえここ最近には私に構ってくれないんだから。誕生日もすっぽかされたら泣いちゃうからね」

「すでに泣いていたと思うけど」

「そんな細かいことはどーでもいいのー！」

時間が経っているとはいえ、よく見れば目が少し腫れている。

それほど泣いていたということなのだが、それを細かいことで流すとは。

「今日はキチンと私をエスコートするように！」

「やるだけやってみるよ」

「ダメ出しとアドバイスはするからね！」

「アドバイスだけ貰つとく」

……そういえば、雪ノ下陽乃の誕生日はいつなのだろうか。

一緒に過ごす時間はそこそこあるけれど、互いに自身の事を話さないから何も知らない。

……………。

たまには……俺から話を振ってみるのも悪くはないか。

十二話

私が楽しみにしていた日は潰れ、予定していた事の全てがパーになっちゃった。

このまま帰っても何だか癩なので引きこもりの雪乃ちゃんに来てもらおう。

あの子は友達も少ないし、夏休みの間に外へ出るのは買い物ぐらい。

姉として妹の健康を考え、外で遊ぼうではないか。

思い立ったが吉日。

半分ほど食べ進めていたパフエを一旦やめてスマホを手に取り、本を読んでいるであろう雪乃ちゃんにメッセージを送る。

きつと前までなら来てくれるか半々ぐらいだっただろうけど、今なら確実に来てくれるような気がした。

本当は雪乃ちゃんが目指すべきところまで引つ張れるよう完璧な姉で居たかったけれど……だからって姉妹仲が悪けりやいいってもんでもないよね。

返事を確認すれば……うん、来てくれると。

だからこの場所の住所を送っておく。

残ったパフエをゆっくり食べていけばいい感じに来てくれるだろう。

「お待ちせ、姉さん」

「やつはろー、雪乃ちゃん」

私の挨拶をスルーしながら席に着いた雪乃ちゃんは店員にアイスコーヒーを頼んでホッと息を吐く。

暑い中を歩いてきたためうつすらと汗をかいており、店内の涼しい空気で気が緩んだのだろう。

「それで、今日は先輩と会う日じゃなかったかしら？」

それで油断していたからか、開口一番に急所を抉られた。

「……………急用が入ったってドタキャンされた」

「そう。それは最低ね」

「そうなんだけど、私もたまに面倒なときドタキャンして逃げる時があるからなんとも言えない……。あ、ちゃんと埋め合わせしてるからケアはバツチリ」

「今日を面倒に思われてるの?」

「んー、先輩は面倒だったら最初に断ってるし、本当に用事ができたと思っただよね」

「姉さんが見たっていう女の子との用事だったりして」

「……それ、考えないようにしてたんだけど」

「可能性の一つとしてあげただけよ」

他人事だと思って涼しい顔をしている雪乃ちゃんはこの先、私と同じ目に遭えばいいと思う。

「そんなわけで予定が空いた私と暇してる雪乃ちゃんで購入物に行こっか」

「別に暇してるわけでは無いのだけれど」

「どんな予定があつたの?」

「……残っている宿題を進めたり、本を読んだりよ」

「猫ちゃんの動画は?」

「……何のことか分からないわね」

バレバレだというのに、未だ隠そうとしている姿を見て笑みが浮かぶ。

私の表情を見て少し不機嫌になっているようなので、これ以上からかうのはやめておかないと。

怒って帰られたら二人での買い物までパーになってしまう。

「雪乃ちゃんが落ち着いたら行こっか」

「ならどこに行くのか決めておきましょう」

「そういうのは決めないで、気に入ったお店に行こうよ。新しい発見があるかもしれないし、そういうのも楽しそうでしょ?」

「姉さんがそう言うのなら」

喫茶店を後にし、電車に乗って大型のショッピングモールへと向かう。

その間、雪乃ちゃんとはどんな服がいいか、部屋に小物飾ろうかなどと話していたからあつという間に着いた気がする。

「うーん、やつぱり人が多いね」

「夏休みの、それも休日なのだから当たり前でしょう。だから家にいるのは悪い事ではないと思うの」

「来ちゃったんだから楽しまなきゃ」

「ちよつと、姉さん!？」

雪乃ちゃんの言う通り、夏休みってことも関係してかいつもの休日よりも人が多い気がする。

それでも見て回る分にはまだ困らないと思うし、お昼も時間をずらせばゆっくり出来そうだ。

人が多いのを見て足取りが重くなっている雪乃ちゃんの手を取り、引っ張っていく。

驚いた声が聞こえるけれど、手を振りほどかれることはない。

うん……こういうのも悪くないかな。

「いやあ、たくさん回ったね」

「本当よ。これを持って帰ると思うと……」

午前は見て回るだけにし、昼食を挟んで午後に買い物をして回った。

今はショッピングモール内にあるカフェで休憩をしているところなのだが。

四つあるイスのうち、二つを占めている買い物袋を見て雪乃ちゃん はため息をついている。

「雪乃ちゃんも十分楽しんで買ってたじゃない」

「それは……そうだけれども」

私と雪乃ちゃんの買った量にそんな大差はない。
だから雪乃ちゃんもあまり強く言えないでいる。

「車呼ぶ?」

「……そうした方が良くもしいわね」

「それならもう少し買えないこともないけど」

「これ以上何を買うのよ」

「雪乃ちゃんがでっかい人形をジツと見てたの、知ってるけど？」

「……………何のことか分からないわね」

きつと、別の日に一人でこっそりと買いに来るつもりなのだろう。

全く可愛いところが――。

「姉さん？」

「……………」

雪乃ちゃんが声をかけてきているような気がするけれど、それどころではない。

雪乃ちゃんの後ろにある植物越しに先輩の姿を見つけた。

それもあの時見かけた女の子と一緒に。

二人は親しげに腕を組んで歩いており、先輩の腕を組んでない手には買い物袋が持たれていた。

「桜くん、次はあっちの店ね」

「……………まだ回るのか」

「あ、デート中にその発言は減点だよ減点」

「そろそろ片腕で持つのは限界なんだが」

あの時と同じように二人は私に気づくことなく、目的のお店へと向かって行く。

「……………はあ」

私と同じ年かまだ中学生であるはずなのに、先輩のことを名前で呼んでいる。

親しげに腕を組んで買い物はデート以外に無いだろう。

私との約束を破ってまで彼女の機嫌を優先させるのはなんだからしくないような気がしたけれど。

「……………本当は互いに、何も知らないんだものなあ」

だから先輩に対して何かを言える権利など私にはない。

「姉さん」

「……………雪乃ちゃん、帰ろっか」

「ええ。……………歩いて帰りましょうか」

雪乃ちゃんにしては珍しく他人の気持ちを汲み取っているような

気がしたけれど、それに意識を向ける余裕はなかった。
雪乃ちゃんの提案を受け入れ、家へ帰るまでの間に会話は無かった
けれど。

なんだか心地よく、よく分からない感情が押し寄せ。
自身の部屋で久しぶりに泣いた。

十三話

「ん？」

「どうかしたの、桜くん」

「いや、知り合いがいたような気がした」

辺りを少し見回すも視線を感じなくなってるので何処にいるのか分からない。

近くにカフェがあるけども、わざわざ戻って確認するほどでもないか。

「桜くん。知り合いがいたとしても、そっちに意識持っていかれたらダメなんだからね」

「はいはい。……あ、少しここに寄ってもいい？」

「別にいいけど……流石の私もこれ以上は気が引けるよ？」

「いや、アキのじゃなくて。今日ドタキャンしたお詫びとして」

「……………むっ？　今まで勝手に私が男の子だと思っていた桜くんの知り合いって女の子なの？」

「そういえば言って……ないな。女の子でアキと同年だ」

知り合いの性別を聞いてから難しい顔をしているアキが静かなうちに買っておこう。

静かなアキというのも珍しいけれど、何をそんな真剣に考えているのやら。

店に入った方がいいが、こういった買い物は今まで経験がない。

今世では大体アキの言う通りに買ってきた。

だから深く考えないで雪ノ下陽乃に似合うか似合わないかで決めればいいか。

「これ、プレゼント用でください」

「はい、かしこまりました」

お金を払い、買ったものを受け取り、振り返ればすぐそこにアキが立っていた。

多少驚きはしたが、普通だったなら声あげて周りから変な目で見られるところだったぞ。

「桜くん、それ渡す意味とか知ってるの？」

「一応知ってはいるけど、こういうのって恋仲の人たちがやることでしょ？ それに渡す側が一方的に思っただけでもいいと俺は考えてる」
「……………知ってるのに渡せる相手なんだ」

アキが言ったことはキチンと聞こえているのだが、何を言いたいのか真意は分からなかった。

「それで、あとはどこを回るんだ」

「あと行くところは二つだから、張り切ってこー！」

少し前までは気にしなかったが、今では多少の恥ずかしさぐらい感じる。

もういい年なのだから少しは大人しくしてほしい。

そう考えながらもどこか楽しいと思っただけだから、人の感情とは難しいものだ。

ドタキャンした日から二日が経った。

今日もまた雪ノ下陽乃と会う約束をしているので、いつもの喫茶店にて本を読みながら待っている。

一昨日買った詫びの品もキチンと忘れずに持ってきているし、これで少しは……………あれ？ なんだろう。

雪ノ下陽乃がドタキャンしたことに怒っている、なんてことはないだろう。

そしたら拗ねている？ ——まさかそんなわけ。

悲しんでいるのだろうか。 ——それこそないだろう。

ならこの気持ちは俺自身が彼女に対して抱いているもの……………なのだろう。

けれどこの気持ちがあんまり分からない。

胸の内に広がるモヤをどうにも意識してしまう。

「や、先輩」

「うん、こんにちは」

気付けば約束していた時間の五分前で、目の前に雪ノ下陽乃が手を

振っていた。

けれどその姿に少し違和感を覚えるのは気のせいだろうか。

「一昨日は悪かったね、ドタキャンなんてして」

「ううん。私も久しぶりに妹とお出かけできたから楽しかったよ」

やっぱり、何か変な感じだ。

話し方なんかは変わらないけれど、どこか一線を引いている。

特典が無かったら気付けないような、小さな違和感。

こう言った仕事なら今後もどんどんして欲しい。

「これ、ドタキャンしたお詫びなんだけど……貰って欲しい、かな」

早めに渡しておかないとズルズルと先延ばしにしてしまう。

白く綺麗でしっかりとした紙袋をテーブルに置き、雪ノ下陽乃の方

へ差し出す。

………ああ。

まだこの気持ちはよく分かっていないけれど。

いま渡したものを受け取ってくれたら嬉しいし、拒否されたら少しシヨックを受けるのはなんとなく分かった。

☆☆☆

一昨日と同じように足取りは重かったけれど、少しだけ軽い足取りに自分でもシヨックを受けた。

もう否定できないくらいに先輩が好きだということは分かっている。

けれど仲良い様子を見せられ、二回目に至ってはドタキャンされているのだ。

それをされてようやく否定することをやめたのだが……もう遅いんだよね。

略奪愛をしてもってのが私なのだろうけど、なんだか先輩相手にそれはみっともない気がした。

別に略奪愛は悪いものと思っていない。

ただなんとなく、そうしたくないなってだけ。

でも先輩を好きなこの気持ちはすぐに消えてくれそうにないから、心の内で一線を引く。

これ以上、どうにかならないためにも。

そんな思いを抱きながら喫茶店へと向かえば、少し難しそうな顔をした先輩がいた。

また何か集中して考えているのか、私が前に来ても気が付かない。

「や、先輩」

「うん、こんにちは」

声をかけてようやくくつて感じた。

何についてそんな真剣に考えていたのだろうか。

ドタキャンの話は嘘をつかないけれど全部は話さなかった。……

まあ、無難な返しだ。

事実、雪乃ちゃんとの買い物は悪いものでなかったし。

そんなことを思っていたら先輩が何やら紙袋を私に差し出してくる。

お詫びと言っていたけれど………え？

今まで先輩から話を振られてこなかったのに、何段階すつ飛ばしてお詫びというプレゼント………？

あれ？ 挨拶の後、先輩から話題振った………？

頭が混乱しすぎて考えが上手くまとまらない。

先輩から貰ったプレゼントを開けて少しは落ち着こう。

これって………。

中身はネックレスだったけれど………先輩は意味を分かっているのだろうか。

【ふたりの絆を深めたい】

【永遠に繋がっていたい】

ネックレスのプレゼントにはそんな意味があるのだが、先輩が知らないなんてこともないだろう。

……これからは一線を引いて先輩と接していいこうと思った途端にこれだ。

これじゃ諦めるに諦められない。

今まで何度もずるいと思ってきた事はあるけれど、今回のこれは群を抜いている。

「一昨日あった妹の誕生日で気になったんだが………雪ノ下陽乃の誕生日はいつだ？」

「……………ふえ？」

普段の私からは出ないような声が出てしまった。

さらに追い打ちで情報が。

妹の誕生日？

私の誕生日？

先輩が私に興味？

先輩って人を呼ぶときフルネームなんだ。

あれ？ 初めて名前呼ばれた？

「慣れない事をしてるのは分かるけれど、もう少し興味を持っていくかなって」

少し恥ずかしそうに笑う先輩を見て、自分の胸が高鳴っている。

色々と混乱していてもハッキリとそう意識しているあたり、私も相当なんだろう。

さっき先輩が言っていた言葉が遅れながらも脳が理解し始めていた。

勝手に誤解して、勝手に諦めて。

やっぱり慣れない事はするものじゃないな。

「私の誕生日、七月七日で一ヶ月ほど過ぎてるんだけど……何か期待してもいいのかな？」

これまで先輩に見せてきた笑顔の中でも一番と言えるほどいい笑みを浮かべていると思う。

十四話

今度会うと決めていた日は出かける約束をとりつけて家に帰り、よくよく思い返してみれば連絡先を貰った時も先輩からだったような気がしたなど玄関のドアを開けた時にふと思った。

あの時は連絡先を貰った喜びで他に何も考えが付かなかったし、いかにして先輩から話題を振らせるか躍起になっていたから仕方がない。

気付けば自然と先輩から話を振っていたことなんて、細かく考えたらあつたりするし。

でも、今回はキチンと私に興味を持ってくれたわけだ。

何がきつかけなのか知りたいところではあるけれど、この大きな変化はいい傾向にある気がする。

勝手に勘違いして不安定になっていたのは軽い黒歴史となってしまうが……些細な問題だ。

「おかえりなさい、姉さん。その様子だと何かいい事があつたのかしら」

「雪乃ちゃん、ただいま！」

「……すぐ抱きついてくるのをやめてくれないかしら」

「軽いスキンシップなのに」

口では嫌がりながらも前ほど強く拒絶があるわけじゃない。

それでも長く構いすぎると嫌がられてしまうから大人しく離れる。

雪乃ちゃんへの構い方がまるで猫なのだが、果たして本人は気付いているのだろうか。

「それで、何があつたのかしら」

「先輩の彼女だと思ってた子が妹だって分かつたの」

雪乃ちゃんが飲み物を用意してくれている間に私はオヤツを皿に移す。

そしていつもと同じ位置のイスに座れば簡単な女子会の始まりである。

最近、こうして雪乃ちゃんと話す時間が増えた。

暑くなってきたから飲み物もアイスティーへと変わっている。

涼しい部屋と冷たい飲み物で少し興奮している気分を落ち着けながら、口を開く。

「つまり結果論ではあるけれど、姉さんの早とちりだったわけね」

「恋は盲目っていうから、仕方ないと思うのだけれど」

「私はなった事が無いから分からない経験ね」

「それを言ったら私だってそうだったよ。でも、恋する乙女の心って難しいものだよ?」

「確かに、姉さんがあそこまであなるなんて思ってもみなかったわ」「それを掘り返されるのは……さすがのお姉ちゃんも恥ずかしいかな」

互いにクスリと笑みをもらし、一呼吸分の間が空く。

「それで」

「ん?」

「先輩に恋人がいないと分かって、姉さんはどうするのかしら?」

「それは愚問だよ、雪乃ちゃん。欲しいものを手に入れるのが私だよ?」

「いつもの姉さんね」

「慣れないこととしてああなっちゃったからね。やっぱりいつも通りじゃないと」

先輩に好意を寄せていそうな子が何人かいそうだし。……確実に一人、断言できるのは先輩のクラスメイトだものね。

そうでなくても先輩は少しずつ変わってきている。

その変化でさらに増えるかもしれない。

まだ多くの人は戸惑っているだろうけれど、聡い子はすでに気付いているだろう。

多少のアドバンテージはあるだろうけれど、油断はできない。

「でも、難攻不落っぽいんだよね……」

「黙ったと思ったら、急に何を言っているのかしら?」

「先輩が色恋している姿を想像できないんだけど」

「それを言ったら、私も姉さんが今こうなっていることに驚きよ」

「……………つまり、落とせると?」

「私はその先輩に会った事が無いから断言はできないわ。……………けれどその先輩も何かのきっかけで姉さんみたいになるかもしれないわね」
確かに、過去の私が今こうなっている私を見たときの反応は何と無く想像できる。

だからといってすぐに先輩も重ねて想像できるかと思えば、そうではないのだが。

「ただ、どうすれば先輩が落ちるのか」

「今までは向こうからきたものね」

雪乃ちゃんの言う通り、これまでは男子の方から寄ってきた。

そのため女子から敵視されそうだったが、それをうまくやっていくのは面倒だったなあ……………って、今これはどうでもいい。

特定の男子とお付き合いしたことはないが、恋愛って立場が変わるだけでこうも難しいとは。

「私も雪乃ちゃんも優秀なのに、今は揃いも揃って役に立たないポンコツだね」

「その言い方は癩に触るのだけれど……………」

「私の分のお菓子も残しておいてよ」

否定できないからって皿に移したお菓子を半分ほど食べなくてもいいじゃない。

「姉さんの言う通りだから的確なアドバイスなのは分からないけれど……………二人きりで何度か出かけて距離を縮めるのが一般的じゃないかしら?」

「んー、喫茶店で駄弁るのはお出かけに入る?」

「……………そうね。もう何度も二人で遊んでいるようなものだったわね」

面倒になったのかどうなのかは分からないけれど、雪乃ちゃんが大きなため息をついている。

「恋愛経験ゼロの私から客観的に見ても脈があると思うから、さっさと告白してみたらどうかしら?」

「簡単そうに言うけれど、結構難しいこと言ってるよ? あと……………少

し、面倒になってない？」
雪乃ちゃん、顔を逸らさないでお姉ちゃんと目を合わせよっか？

十五話

夏が終わり、秋になった。

緑色だった葉も赤く色付き、見慣れた景色に新鮮さを与えてくれる。

最近は過ごしやすい日も増えてきたけれど、これから寒くなると思うと少しだけ気が滅入ってしまう。

「お待たせ、先輩」

「終わる時間が一緒なんだ。ほとんど待っていないよ」

それは今までの話であり、これからは違う。

先輩と変わらず過ごしていけるのなら、それもあまり気にならないと思う。

一緒に過ごす時間がとても暖かく幸せだから。

「そう言えば、もう衣替えの時期か」

「先輩も着替えてるのに、私見て気付くんですか？」

「んー、確かにそうだな」

夏休みの間、何度も喫茶店だけじゃなく色んなところに先輩とお出かけ——デートをした。

けれどまだ、私と先輩は恋仲じゃない。

……何度かチャンスはあったのだ。

あったのだが……そのチャンスが来るたびに私はチキンとなってしまう。

そして家に帰り、雪乃ちゃんにそう報告すれば呆れたため息が返ってくるのだ。

恋愛ものの小説を読んだとき、早く告白すればいいのに。なんて思ったりもしていたけれど。

もし断られて今の関係が壊れるくらいなら、このままぬるま湯でもいい。

今の私なら、そう考えていたヒロインの気持ち痛いほど良くわかる。

創作であれば分かりやすくするため、相手がどう思っているのか描

写されたりしているが、現実ではそうもいかない。

先輩からもよく話してくれるようになってきたから悪く思われて
いることはないだろう。

けれど先輩が私に抱いている『好き』がどの『好き』なのか分から
ない。

けれどそろそろ、ぬるま湯からも出て行かなくちゃいけないのだ。

再来年になれば先輩はいない。

強制的に変化をしなければいけない時間というものはやってくる。

「俺が変わったきっかけが雪ノ下陽乃だから、かな」

「……………そうなんですか？」

「ああ、そうだよ」

☆☆☆

「ああ、そうだよ」

そう言って頷けば、雪ノ下陽乃は嬉しさを抑えようとして抑えきれ
ず、ニヤニヤとした表情をし始めた。

それにしても雪ノ下陽乃の言う通りだ。

葉の色が変わっていることも、クラスメイトたちが衣替えをしてい
ることに気付いていた。

けれど季節が変わったんだなと確かに感じたのは雪ノ下陽乃を見
てからだ。

変わったきっかけが雪ノ下陽乃だからと答えたが、本当は別の理由
がある……………気がする。

そしてその答えも知っているような……………。

でも、それを明確にしようとする今までの通りではいられないような
気がしてずっと目を逸らしている。

けれどそろそろ目を逸らし続けるのも限界な気がしてきた。

変わらない関係など絶対はない。

不変だと思っていたものでさえも時間がそれを変えてしまうのだ
から。

今一度、はつきりとさせるべきなのだろう。

俺は——雪ノ下陽乃が好きなのだ。

きつと、この気持ちは転生する前から抱いていた。

そして今、気がついた。

何故、雪ノ下陽乃に心動かされるのかを。

——好きな人の言葉が心に響かないなんてこと、ないだろう。

——好きな人の行動を意識しないなんてこと、ないだろう。

原作のキャラだとか関係ないのだ。

いま、ここで俺は生きていて、目の前にいる雪ノ下陽乃もまた生きて
いる。

気付けば簡単なことだった。

ただそれだけの事だったのだ。

気付いた今、勢いのままに言わなければ今後はずっと大事な場面で
チキンになると思う。

そう決意して口を開いたのだが。

「私、先輩のことが好きです」

雪ノ下陽乃にそう言われ、俺は脳の処理が追いつかずに固まるしか
なかった。

十六話

「こんにちは、先輩。相席いいですか？ あ、アイスコーヒーお願いします」

「ん？ ……………許可出す前に座って注文している人のセリフじゃないな」

キチンと覚えてくれている事がとても嬉しく、それだけで満たされるような気さえする。

先ほどのセリフは私と桜くんがこの喫茶店で初めて交わした言葉である。

校庭にいた桜くんを初めて見た日から一年。

桜くんと付き合い始めてからはだいたい半年。

私は二年に。桜くんは三年へと進級した。

恋人になつてから変わったことは桜くんと出かける回数が少し増えたぐらいだろうか。

それでも変わらず、学校が終わった後はここでノンビリとした時間を過ごしてきた。

何か変化があったのに、何か変わらないものがあるだけでとても嬉しく思える。

「いつもならお待たせなり、挨拶で座るのに何かと思ったよ」

「私が言えた事じゃないですけどよく覚えてましたね」

「そりゃ、あそこまで懐に入ってきたのは陽乃が初めてだからな」

「よく桜くんに話しかけてたクラスの女子は？」

「この場所で、っていうのが俺にとっては大事なな。…………それに、陽乃は少し特殊だったから」

最後の特殊っていうのはよく分からないが、あまり関わりがなかった頃の私を大切であるはずの場所に受け入れてくれたことを知り、また深く好きになったと実感する。

私はこんなにもチョロかったのかとたまに思わなくもないが、オタクがいうところの『沼にハマる』という意味を思い知った気分だ。

「桜くん、今年で卒業な訳だけど。どこに行くのか決めてるのかな？」

「んー、……陽乃が行くところに行こうかなと思ってる」

「え、あそこも結構いいとこだけど、桜くんならもつといけるでしょ？」

「そうだけどき……ね？」

桜くんの言わんとしていることは分かる。

それを嬉しく思う反面、少し才能が勿体無いようにも思ってしまった。

「陽乃は気にしないで。俺が好きでしてることだからさ」

気遣ってくれてるのは分かるが、それでもしこりは残ってしまう。

桜くんもそれが分かっているからか、それ以上何か言ってくることは無かった。

「そう言えば、去年は学園祭を別々で楽しんだわけだが……今年はどうする？」

「もちろん、一緒に回るよ？」

「何かやろうと考えているのなら早めに言ってくれ。陽乃の無茶振りをこなすのはすごく疲れる」

「それでもなんとかしてくれるのが桜くんだから」

「もうすでに何をやるか考えてる顔してる」

確かに桜くんの言う通り、何をやるかすでに決めてある。

出会ってからずっとだが、桜くん相手に隠し事ができた試しがない。

けど隠し事はできないが、白状しなければそれがどのようなものかバレないのは経験で知っている。

「……なるほど、バンドやるのね」

「うえっ!？」

大丈夫なはずだろうと思っていたらあっさりとバレ、私らしからぬ変な声が出してしまった。

「な、何故それを……」

「いや、雪乃ちゃんに聞いたらすぐ返事くれたよ」

「口止めたはずなのに……」

いや、まあ話しちゃうだろうとは思っていたけど……。

雪乃ちゃんは桜くんのこと、すごい慕っているようだし。

「まあ、バレちゃったものは仕方がないね」

☆☆☆

吹っ切れたように学園祭で何をしようとしているのか楽しそうに話している。

おそらく内容の全てではないだろうが、ある程度分かっていたら何とかなるはず。

教えてくれた雪乃ちゃんにお礼のメールを返しておき、頼んだ時はホットだったが時間を置いて少し冷めてしまったコーヒーに手を伸ばす。

陽乃と付き合い始めてそれなりの時間が過ぎ、これからあるであろう未来に想いを馳せる。

……今のことだけ切り抜けば俺、死ぬ間際みたいだな。

そんなことはどうでも良く。

モノクロだった世界に色をくれた陽乃にはとても感謝している。

今では同級生、後輩とも普通に言葉を交わすようになっていたから自分でも驚きだ。

これから先、長い時間を陽乃の無茶振りに付き合い合われるのだろうが、とても楽しみである。

取り敢えずは学園祭で演奏する曲と、楽器の練習からかな。

最終話

月日が経つというのはあつという間である。

陽乃から学園祭でバンドをするといった話を聞いたのはつい最近だったはずなのに、もう当日を迎えていた。

演奏するメンツは如何するのだろうかと思っていたが、バンドをする話を聞いた次の日には平塚先生と雪乃ちゃんの二人と顔合わせをしている。

先生を参加させるのはどうかと思うが、それよりもまだ高校生ですらない雪乃ちゃんが参加して平気なのだろうかと思ったりもした。

そこは陽乃だからと自己完結して深く突っ込んではいないが。

陽乃がギターとボーカル。雪乃ちゃんがキーボード。平塚先生がドラムで俺がベース。

演奏する曲は陽乃が作詞作曲したらしいが、いい出来だと思う。メンツがメンツなので上達も早く。

早い段階から合わせて弾いているため、完成度は高いものとなっていた。

今舞台に立っている人たちが終われば、次は俺たちの番だ。

全員舞台袖に集まっているが、近くにいるのは陽乃だけで二人は少し離れたところにいる。

「陽乃、ありがとう」

「へっ？急にどうしたの？」

突然感謝の言葉を述べられた陽乃は少し目を開いた後に瞬きをし、首をかしげる。

その仕草に胸の内から何か込み上げてくるものがあるけども、陽乃の頭を撫でることで押しとどめる。

「俺はつまらない人間になっていた。周りの景色はモノクロに見え、色を失った」

大事な話と察したのか、少し真面目な表情で聞いてくれる。

けれども頭を撫でられるのが嬉しいのか頬が緩んでおり、あまり意味をなしていないのだが。

「けれど今、こうして高校最後の文化祭を楽しんでいられるのは陽乃のおかげだ。……だからとても感謝している」

俺のセリフを最後まで聞いた後。

陽乃は俺の頭を撫でていた手を取り、両手でギュツと握りながら真っ直ぐに目を見て告げる。

「——感謝するのは私の方だよ」

恥ずかしいのかすぐに目を逸らされてしまったが、耳まで赤くなっているので隠せるものではない。

平塚先生と雪乃ちゃんがこちらを見て話しているようだが、こちらの声は聞こえていないだろう。

けれど俺は二人の話し声が聞こえる。

演奏が終わった後、陽乃をからかう予定だそうだ。

「私も桜くんと同じ。まさかこうなるとはあの頃の自分は思っても見なかったけれど、今がとても楽しいの」

「それなら、失った色を取り戻した俺たちは世界がこんなにも鮮やかだと知ったわけだ。それは今この場では二人だけが知る秘密だな」

俺がどういう意図で今、再びこの話を始めたのか理解してくれたのだろう。

陽乃はこれまで見てきたものよりも一層魅力的な笑みを浮かべていた。

世の中がモノクロに見えていた事は付き合い始めてしばらくしてから話している。

そこで陽乃も同じだということも聞いていた。

今回演奏する曲のタイトルは『二人だけが知る』となっている。

学園祭でバンドをやろうと陽乃が決めたのは、伝わらなくても誰かに向けて伝えたいという矛盾する気持ちからだそうだ。

歌詞を渡されてから今この話を聞いていたが、らしいというかなんというか。

そしてそれを悪くないと思っているから、価値がある大切なものだと思いますから。

目の前にいる彼女^{はるの}にとてつもない感謝を抱いている。

「そろそろ時間だぞ」

平塚先生に声をかけられ、陽乃はパツと手を離す。

「みんなの準備は万端でしょ？」

「もちろん」

「ええ」

「大丈夫」

何事もなかったかのように確認を取る陽乃に、俺たちは頷き返す。

名前を呼ばれ舞台上上がり、チューニングをしている時にふと顔を上げてみれば。

人がたくさん集まり、演奏をいまかと楽しみに待っていた。

その中にずっと俺へと構い続けていた彼女の姿が見える。

俺を変えたのが自分じゃなく陽乃であること、隣に自分が立っていないこと。他にも様々な感情が見て取れる。

少しだけ胸の内が痛んだように感じたが、その気持ちを抱くことは鳥澁がましい。

チューニングを終えたベースを一度だけ鳴らし、切り替える。

皆と顔を合わせ、準備が出来たことを確認し、平塚先生がステイツクを掲げたのを見て前へと向き直る。

今がある俺の一部分に彼女がいることを伝えるためにも不甲斐ない姿は見せられない。

彼女のためだけにとはいかないけれど、少しでもこの気持ちが伝わってくれたらと思いつながら。

俺はベースの弦を弾いた。

演奏はあつという間に終わった。

今日あった出来事を忘れることはないだろう。

いまだに胸のうちには興奮が残っている。

学園祭はまだ終わっていないが、俺は一足先に帰らせてもらう事になっている。

予定になかった事だが、明日もある学園祭のステージで演奏する事

になった。

クラスみんなの気遣いか、彼女とゆつくりしてきなど心遣いをいただいたが。

その件の彼女は学園祭実行委員であるし、今頃は二人にからかわれている事だろう。手痛い反撃を二人が受ける流れまで読めた。

校門を出ようかというところで見覚えがあるようなアホ毛をはやした猫背の男の子を見つけた。

隣には可愛い女の子と一緒にいる。

演奏している時も一番奥で見られている事に気づいていたが、こんな形で接点ができるとは。

「ねえ、君」

「はあ……俺っすか？」

「ちよつとお兄ちゃん。さっきバンドで演奏していた人だよ！」

この兄弟のやり取りを目の前で見られる事に少し感動を覚えている。

そんな事より要件を早く言わなければ彼が警戒を強めてしまうな。

「君、明日も見にきてくれたのなら……このベースを譲ろうかと思うんだけど」

背負っているケースを少し動かして見せれば、少しの間黙っていたのち、口を開く。

「……………妹は渡しませんよ？」

「ちよ、ゴミいちゃん！」

……本当にそう呼ばれているんだね。

そして斜め下の返事にどこからか疲れが押し寄せてきた気がした。

「いや、演奏をしている時に君からの視線に気づいてね。きつと手をつけるだろうって思ったからさ」

「……………はあ」

「妹さんかな？ 彼、明日も連れてきてくれない？」

「もちろんです！ 首輪つけてでも引きずって来ます！」

「お兄ちゃん、首輪つけられて街中歩くのは嫌だからね？ トラウマになって家に引きこもっちゃうよ？」

「うん、ありがとう。それじゃまた明日」

何か言っていた彼のことは俺も妹ちゃんも無視して話を終わらせた。

校門を出て角を曲がるまで手を振ってくれる妹ちゃんに、完全に警戒を解いていないながらも最後に一度頭を下げてくれた彼にクスリと笑みをこぼす。

これから何度でも思うだろう。

こうして自分から関わりを持つとするなんて。

そしてこれからも今まで無下にして来たものを体験して、大切なものへとなっていく、その側には陽乃がいつもいて笑っているのだろう。

ふと道の真ん中で立ち止まり、空を見上げる。

秋にしては少し暑い今日の空は何だかいつもより色鮮やかに、透き通って見えた気がした。

おまけエンディング (BAD END)

まだ十代だというのに、こんな事をしていたらこの先どうしているのだろうか。

それに今はたまたま人がいないからいいが、側から見たら立ち止まって空を見上げてる変な人だ。

今更ながら少しの恥ずかしさを覚え、帰るかと一步踏み出した時。

「——桜くん」

微かに、名前を呼ばれたような気がして振り返ろうとした瞬間。

何かが背中へとぶつかってきた。

確認しようにも頭の部分しか見えず、誰なのか分からない。

数秒も経っていないというのになぜかその時間はとてつもなく長いと感じた。

背中から離れていくのが見えたので振り向き、誰なのか確認すれば。

いつも構ってくれていた彼女が立っていた。

それも——血濡れの包丁を手にとって。

それを認識した瞬間に背中が熱を持ち始め、込み上げてくるものを我慢せずに咳き込めば血を吐き出し、足元に血だまりができる。

徐々に力も抜け、膝をつき体も倒れそうなところで彼女に抱きしめられた。

昔ならば特典のお陰で刃物でもかすり傷つけばいいような感じだったが、今の俺は一般人と変わらない。

意識して特攻、特防を発動することはできるが、こうなってからだと既に手遅れだ。

「なん……………で……………」

「私ね、本当に桜くんが好きだったの」

刺されたところが太い血管にでも当たったのか、既に意識が薄れゆく感じがする。

絞り出すようにして出した問いの答えが返ってきたかと思えば、キスをされている。

「私のファーストキスだよ。……私も桜くんの初めてが欲しかった。でも桜くんを変えたのも、初めてを持っていったのもあの女。だからね、あの子がいなくなればいいって初めは思ったの。でもね？ 考えたんだよ？ そうしても桜くんは私に振り向いてはくれないだろうって。だから考えて、考えて、考えて、考えたの。一緒に堕ちていけばいいんだって」

濁った瞳で真っ直ぐに俺を見ながら休みなく言い切った彼女は何のためらいもなく手に持っている包丁で自身の頸動脈めがけて刃を立てていた。

「とつても、素敵だと思わない……？ 私と、……桜くんの血が混ざって一つになってるの……」

血を失っていく彼女も俺を支えるどころか自身をも支えられなくなり、二人して血だまりの中へと倒れこむ。

「桜、くん……大、……すき……」

最後にそう伝えて彼女は事切れたようだ。

かくいう俺もその後を追うかのように意識を失った。

☆☆☆

最初は話を聞いた時、ただの冗談だと思った。

次の日もまたライブがあるというのに、桜くんが死んだなんて。

病院に行つて顔を見てもただ寝ているだけのように見えた。

けれど今、こうして喪服を着て葬式に来ている。

だけでもまだ、実感が湧かずにふわふわとした気持ちでいた。

彼の両親の願いで葬式はひっそりとやるようだ。

彼の家族、その親戚、私の家族、平塚先生、そして比企ヶ谷家。

なんでも最初に見つけて通報してくれたのが今日来ている兄妹らしい。

あの日、本来なら彼と帰り道が違うはずだった兄妹なのだが、走っ

ていった女の人がどうにも気になったらしい兄が向かったところ、見つけたらしい。

もう少し早かったらと後悔しながら私に謝ってきた。

彼との接点はその少し前に数分会話しただけだというのに、なんとも義理堅いというか。

次の日のライブが終わった後にベースを譲る話をしていたらしいのだが。

「雪ノ下さん」

「比企ヶ谷、くん」

「あの、ベースは俺が持っているよりも……」

「ううん。彼が君にあげるって言ったんだもの。約束を守らないと私が怒られちゃう」

「……そうですか」

私は今、昔のようにうまく仮面をつけられているだろうか。

そうできている自信は——全く無い。

「たくさん練習して、上手くなったら聞かせて欲しいな。そう彼も願っているだろうから」

「……はい」

彼は一度頭を下げると家族の元へと戻っていった。

入れ替わるように雪乃ちゃんが私の隣に立って手を握ってくれる。

「無理はしないようにね」

「それは出来ない相談、かな」

「……そうね」

今だけは優しさが辛い。

胸にポツカリと穴が空いたような、自身の半身がいなくなったような。

そんな虚無感がある。

けれど——。

「姉さん、お腹が痛いのなら少し横になっても」

「ううん。大丈夫」

私はやっぱり子供なのだろう。

だけど今はその子供な自分に感謝している。

一度だけのイタズラだったつもりだが、こうして彼との繋がりを残せるのだから。

繋がりを残せるからこそ、私はまだ壊れないでいられる。

葬式が行われる中、泣かずにずっと微笑んでいる私は周りから無理しているように見えたらしい。

何度も心配そうな声をかけられたが、その度に大丈夫と返した。

最後まで彼を見届けられない方が耐えられない。

葬式が終わった後、彼の家族と私の家族には残ってもらった。

お腹にいる子を伝えるために。

世間体や家の事も考えず、死んでも産んでやると思っている私はすでに壊れているのだろうか。

けれど意外にもあまり反対はされなかった。

色々大変なところはあろうけれど、両家族が手を貸してくれるそうだと。

私の家族が手を貸すのはおそらく、こうでもしないと私がどうなるか分からないからだろうけれど、それでも嬉しいと思ってしまう。

☆☆☆

「ねえ、お母さん」

「ん？」

「お母さんはお父さんの事が好きなんだよね？」

「今でもずっと好きだよ」

あれから十数年。

色々あったけれども、無事に生まれた娘は明日から高校へと通い始める。

「私、人を好きになるって気持ちがよく分からないけれど、お父さんの写真を見て胸が温かくなるのがそうなのかな？」

「それはこれからもっと色んなことに触れて知っていけば、いずれ分かるよ。人の気持ちは誰かに言われて決められるものじゃないからね」

「そういうもの？」

「そういうものよ」

愛おしさを込めて頭を撫でれば、くすぐったいのだろう。

身をよじっているが、嬉しそうだ。

純粹で頭がいい部分はおそらく私に似たのだろう。

けれど人の気持ちに、自身の気持ちに少し鈍いところは彼そっくりだ。

でも、彼は変わった。

ならばきつとこの子も素敵な出会いをして変わるだろう。

☆☆☆おまけ予告（続かない）

『私、先輩と会わなければよかったって今は思うの』

『陽乃。私はお前を軽蔑するぞ』

『あなたの腕前、プロと言ってもいいレベルよ』

『雪ノ下雪乃は俺を通して桜先輩を見ているだけだ。俺のことなんて見ていない』

『きつと彼はそう望んでいるはず』

『君、彼と真反対だけれどそっくりだよ』

『彼なら、彼ならって！ もう彼はいないの！』

『この子のためなら——頑張れる』

桜が亡くなってから早二年。

雪ノ下雪乃と比企谷八幡は高校で再会を果たす。

すれ違う少年少女の思いはどのような結末へと向かっていくのか。

おまけエンディング（HAPPY END）

昨日の盛り上がりがあったからか、口コミで広がってさらに人が増えて気がする。

その中でも彼の雰囲気分かるってのもすごいと思う。

約束通り来てくれて少し嬉しい。

演奏が始まれば盛り上がりはすごいことになり、時間だというのにアンコールが止まらないのは素人ながら興奮が高まり鳥肌がたった。

と言っても演奏するために練習した曲は二つしかなく、アンコールに応えられる曲をどうするかといったところだ。

盛り上がる曲で、全員が弾ける曲。

俺と平塚先生は少し前に流行ったアニメを語るのだが、雪ノ下姉妹が分からない。

「一度聴けばいけるよ」

「私は譜面さえ用意してもらえるなら何とか」

陽乃は言わずもがな、雪乃ちゃんも十分に天才の部類だと思う。

未だ興奮冷めやらぬステージには俺が立ち、時間稼ぎをすることに。

平塚先生には譜面の印刷を頼み、雪ノ下姉妹には曲を聴いてもらう。

何もプランがないまま俺が姿を表せば、さらに声が大きくなる。

先ほどまではそれがとても心地よかったが、今では少し怖い気もする。

久しぶりに特防を使いそうになるが、今こうして俺があるのにそうするのは何か違う気がした。

中央に立ち、マイクを前に何を話すか考えていけば。

先ほどまで騒がしかったのが嘘のように馬が静まり返る。

「……あー、今、急遽三曲目を準備してるから、それまでは少し俺の話に付き合ってもらおうと思う」

……やっぱり、特防少しだけ使っちゃダメですかね。

ダメですか。

約四分も話すのはきつかったが、舞台袖で三人がスタンバってるのもう終わりにしてもいいだろう。

「——ってわけで、俺の独り言みたいなものに付き合わせて悪かった。おかわりが用意できたみたいだからあと少しだけ待っててくれ」

話を切り、ステージ中央からベースとしての立ち位置に移動するわずかな間。

三人から意味ありげにニヤニヤとした表情をしながら肩を叩かれた。

その意味を今は理解できなかったが、その混乱は置いて目の前の演奏に集中しなければ。

屋上の柵にもたれかかりながら、深く息を吐き出す。

陽も傾き、空は夕暮れに染まっている。

お祭りの時間も終わり、本格的な撤収は明日だが簡単な片付けを行なっていた。

俺はクラスメイトからのご厚意で片付けを免除されている。

「お疲れ、桜くん」

「陽乃もな。それに雪乃ちゃんや平塚先生もお疲れ」

「お疲れ様です」

「おう」

みんな疲れた様子だが、どこか満たされているようにも見える。

「そういえば、俺の話が終わった後にニヤニヤしてたのは？」

「あー、あれね……」

「まあ……」

気まずそうに目をそらす雪ノ下姉妹だが、さすがは平塚先生だった。

「そりゃ、真っ赤な顔で惚気話を始めるんだからああなるだろうよ」

「……………惚気話」

俺は公開告白をしていたのか？

思い返してもどこがそうなるのか全く分からない。

陽乃が顔を真っ赤にして俺と目を合わせようとしないから、平塚先生が言ったこと正しいのか……。

「俺は知らないうちに黒歴史を刻んでいたのか……」

「その、悪くなかったと思いますよ?」

「暫くは揶揄われるだろうけど、悪い気はしなかったよ?」

「いやー、まだまだ青いな。いい傾向だ」

一人だけ大笑いをしている人は置いておき、そろそろ約束の時間か。

タイミングよくドアが開き、恐る恐るといった様子の兄妹がやってきた。

昨日の帰り際にベースを譲ると話した例の兄妹だ。

「ほんとごめんね、わざわざここまできてもらって」

「いやほんと、居心地が悪かったですよ」

「いやー! ライブ、とても良かったですよ! 特にアンコール入る前にあつた先輩の語りとか!」

兄の発言を隠すように声を張る妹ちゃんに悪気はないのだろう。

けれど俺は気づいたら手で顔を覆っていた。

「小町、それ以上言うのはやめてあげろって」

「へ? どうして?」

「どうしてもだ」

彼の方は自身も体験があるのか、なんとも言えない目で見てくる。

あ、これはこれでダメージあるわ。

側で三人が笑ってるの忘れないからな。

絶対に仕返ししてやる。

気を取りなおすために咳払いをし、本来の目的をさっさと済ませてしまおう。

「それじゃ、約束通りこれを君に譲ろう」

「今更ですけど、本当にいいんですか?」

「いいから言ってるんだよ。その代わり、上手くなって俺に聞かせてくれ」

こう言ってしまったえば彼は嫌でも上手くならざるを得ない。
一方的にある程度知つていいるとは言え、ズルイ言い方をしてるのは
自覚している。

それに気づいているから、彼も微妙な表情で受け取っているのだら
う。

それでも、もしかしたらの可能性で彼と雪乃ちゃんが同じステージ
に立ってる姿を思ってしまう。

☆☆☆

あれから十数年が過ぎた。

俺と陽乃どころか、雪乃ちゃんや八幡も大学を出て働いている。

本当、陽乃と出会ってから月日が経つの早く感じる。

けれどそれだけ、毎日が新鮮でいられていることなのだろう。

今では小学校になろうとしている娘がいる。

その下にはようやく少し話せるようになった息子も。

「お父さんとお母さんはいつもラブラブだね」

ある日の休日、娘からの唐突な発言に俺と陽乃は少し驚いて顔を見
合わせる。

そしてどちらからと言うわけもなくクスリと笑みをこぼす。

「そうね。お母さんはお父さんのこと大好きよ。それと同じぐらい夏
美のことだね」

「あははっ。お母さん、くすぐったいよ」

陽乃に抱きしめられて頬ずりをされている夏美はくすぐったそう
に身をよじるが、それ以上に嬉しそうだ。

僕は？　と言った感じで俺の膝の上に座っている息子の秋斗が見
上げてくるが、安心させるように頭を撫で。

「俺もお母さんも、秋斗の事大好きだからな」

「えへへ」

嬉しそうに笑う姿を見て、胸の内に温かいものが広がる。

これからもこういった日常のページが増えていく幸せをくれた

陽乃に感謝を込め、頬に口づけをした。